

Citation : Rigon M, Pereira LM, Bortoluzzi MC, Loguercio AD, Ramos AL, Cardoso JR. Arthroscopy for temporomandibular disorders. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2011, Issue 5. Art. No.: CD006385. DOI: 10.1002/14651858.CD006385.pub2.
CRG名 : Oral Health

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月 : 9 April 2010

Clib issue No.; N/U: 2010 issue 3; New

背景 : 顎関節症は器質的, 心理学的, 精神社会的な多くの因子が関与する包括的疾患と考えられている。その症状は咀嚼筋, 顎関節や関連器官もしくはこれら複数器官に生じうる。40-75%の人は本疾患の兆候を少なくとも一つを認め, 本疾患の症状を少なくとも一つ有する人は33%であると報告されている。顎関節症患者の兆候, 症状の緩和のために関節鏡視下手術が実施されてきたが, その効果は総合的に判断されているわけではない。

目的 : 顎関節症患者の兆候, 症状の管理に対する関節鏡視下手術の効果を評価する。

検索戦略 : 本レビューでは, The Cochrane Oral Health Group Trials Register (to 23 December 2010), the Cochrane Central Register of Controlled Trials (CENTRAL)(The Cochrane Library, Issue 4, 2010), MEDLINE via OVID (1950 to 23 December 2010), EMBASE via OVID (1980 to 23 December 2010), LILACS via BIREME Virtual Health Library (1982 to 23 December 2010), Allied and Complementary Medicine Database (AMED) via OVID (1985 to 23 December 2010), CINAHL via EBSCO (1980 to 23 December 2010)を検索した。出版日時や言語に制限は加えなかった。

選択基準 : 顎関節症に対する関節鏡視下手術に関するランダム化比較臨床試験(RCT)を対象とした。

データ収集と分析 : 2名のレビューアがデータ抽出を別々に行い, 3名のレビューアが比較試験に影響しうるバイアスの危険度を評価した。対象とした論文の著者に連絡をとり, 追加情報を得た。

主な結果 : 349のRCTのうち, 7論文が包含基準に合致していた。バイアスの危険度は全ての研究において, 高くない, もしくは不明であった。治療後6ヶ月の痛みをアウトカムとした研究が2件存在した。関節鏡視下手術群と非外科的治療群の間に有意な差は認められなかった(standardized mean difference (SMD) = 0.004; 95% confidence interval (CI) -0.46 to 0.55, P = 0.81)。81人を対象とした2件の研究で, 異なる外科的療法(関節鏡視下手術と関節腔内洗浄療法)12ヶ月後の疼痛レベルが比較されたが, 統計学的有意差は認められなかった(mean difference (MD) = 0.10; 95% CI -1.46 to 1.66, P = 0.90)。関節鏡視下手術とオープンサージェリーの比較を行った3件の研究では, 治療後12ヶ月の術後疼痛が, オープンサージェリー群で有意に低下していた(SMD = 0.45; 95% CI 0.01 to 0.89, P = 0.05)。6種の臨床アウトカム(関節鏡視下手術もしくはオープンサージェリー後12ヶ月後の35mm以上の前歯切端間開口距離, 5mm以上の最大前方滑走距離, クリック, クレピタス, 顎関節部の圧痛, 咀嚼筋の圧痛)のうち, 最大開口時の切端間距離に関しては2つの研究が比較を実施している。その結果, 統計学的な有意差は認められなかった(odds ratio (OR) = 1.00; 95% CI 0.45 to 2.21, P = 1.00)。外科的療法12ヶ月後の最大開口時前歯切端間距離を比較した研究が2件あり, 関節腔内洗浄療法群に比較して, 関節鏡視下手術群が統計学的有意に大きかった(MD = 5.28; 95% CI 3.46 to 7.10, P < 0.0001)。40人の被験者を対象とし, mandibular functionality (MFIQ)をアウトカムとして術後12ヶ月後の顎機能を評価した研究が2件存在していたが, 統計学的な有意差は認められなかった(MD = 1.58; 95% CI -0.78 to 3.94, P = 0.19)。

レビューアの結論 : 関節鏡視下手術, 非外科的治療のどちらも術後6ヶ月後の疼痛を減少させた。関節鏡視下手術と比較すると, 術後12ヶ月後の疼痛緩和には, オープンサージェリーが, より有効であった。しかしながら, 顎機能やその他の臨床診査項目には, 両治療間に差は認められなかった。関節鏡視下手術は, 関節腔内洗浄療法に比較して術後12ヶ月の最大開口時前歯切端間距離を増大させたが, 疼痛に関しては差が見られなかった。

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点
がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の
日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英
語版)の内容をご確認ください。